

## 第1回まちづくり講演会 記念講演「分かち合い」の経済学

神野直彦でございます。このような記念すべきときに明石市長のお計らいで講演できますことを光栄に思います。この条例の基本は、明石市の民主主義を支える庶民的な基盤を強固にするというところにあるのではないかと思います。そうしたねらいで私が思い出すのは、私の恩師は、宇沢弘文先生で、世界でもっとも優秀な偉大な経済学者ですが、宇沢先生がなぜ経済学を目指すようになったかという逸話を思い出します。宇沢先生はお医者さんを志していたんですね。医学部を出て医者になろうとしたのですが、ちょうど一高、現在の東京大学の教養学部ですが、一高に入られたときに終戦を迎えました。その一高を占領軍が占守しにきたんですね。当時の一高の安倍能成校長先生が占領軍に非常に流暢な英語であったそうですけれども、ここは審理を追求するあらゆる学問の基礎である。リベラルアーツを学ぶ聖なる場である。占領軍にこのようにおっしゃったそうです。それを聞いた占領軍は尻尾をまいて退いていった。それを見ていた先生は、自分は医者になるのではなく、社会の医者になろうと志して、経済学を学ばれたということでございます。安倍能成先生は次の年に幣原喜重郎内閣のもとで文部大臣に就任されます。当時の占領軍のマッカーサーは、日本が戦争に走ったのは、教育が悪かったからだ。日本の教育をどうにかして変えなければならないと考えていました。そこでアメリカから教育使節団を呼びます。安倍先生は、当然文部大臣ですから、その使節団に対して挨拶をされたわけです。その歓迎の挨拶の中で、新聞にも大々的に報道されていますが、日本がこの大戦で犯した最も大きな罪は、暴力で他国を侵略し、その国の歴史と伝統を無視して踏みこじり、我が国、日本の文化と教育を押し付けたことだとおっしゃいました。そうすると教育使節団は感動のあまり割れんばかりの拍手が沸き起こり、団長が安倍先生に握手を求めました。どうしてそのようなことになったのかなという、アメリカの教育使節団のメンバーたちは、アメリカでもっとも偉大な哲学者であり、教育学者であったジョン・デューイの教えを、あるいはデューイの教育思想の影響を受けた人たちだったのです。デューイの教育感では学校教育の第一の原則、なぜ学校で教育する必要があるのかということ、生まれも育ちも違うこどもたちが、同じ教室という空間で集い、学び、遊ぶことである。教育によってこどもたちに格差が生まれている。その格差は何かというと金儲けをする能力の格差なんです。すべてを金儲けに結びつけるような社会にしてしまっていて、人間の社会の構成員として、私たちの次の社会を担い、次の民主主義を担っていく構成員を作り上げていくと

いう意識に完全に失敗したということだと思います。それを象徴する出来事が小泉・竹中路線のもとで出来上がった金融教育元年といわれたものであります。子どもたちに小さいうちからお金儲けの楽しさを教える。そのような教育を始めるに当たって、当時の日銀の福井総裁は子どもたちに次のように言うわけです。あなた方の大切なものは、すべてお金に変えなさい。お金にかえておけば、好きなときに何でも買えるんですよ。こういうふうに教えたんですね。そういうことを日本は始めたわけです。子供たちは完全にミダスの呪い、ミダスの呪いというのは、最初に金として貨幣をつくったのがギリシャのミダス島です。このミダスの呪いっていいものは、そのミダスの王が、自分の望みは何かというと、自分が手に触れるものはすべて黄金になる、金になるってことがミダスの王の望みだったんですね。その望みがかなえられたときにですね、王は驚くべき事実気がつきます。自分が口にするものを、食べ物に手を触れるとそれが黄金に変わってしまう。自分の愛する娘に手を触れると、それが黄金に変わってしまうんですね。日本は、このミダスの呪いにとりつかれて、幸福な社会というのは儲かる社会だというふうに勘違いをし始めているんですね。

宇沢先生がいつもおっしゃるのは、宇沢先生の御友人で、山本先生とおっしゃいましたか、小児科の先生が、ボランティアでカンボジアに行って子供たちを医療の活動を行っていらっしゃいます。その方が子供たちに、あなた方のもっとも大事なものを書きなさいと言うと、宇沢先生は社会的共通資本という概念を出されているんですが、社会的な共通資本を出します。美しい川、緑なす森、それから家族、それからコミュニティですね、そういったものを描くんです。大切なものはそういうことですね。お金で買えないようなものなのですが、それに対して、そのカンボジアの子供たちが嫌いなことってというのはみんな同じです。一つは人身売買、もう一つは売春です。子供たちは、感覚的にはお金では何も買えないんだということがわかっているはずであります。

あとでお話をいたしますが、今、私たちは大きな歴史の大転換期に生きています。大きな歴史の大転換期には、必ずローマ法王がレールム・ノヴァルムをお出しになります。レールム・ノヴァルムというのは回勅、勅令を回すっていう回勅ですね。すべてのキリスト教の司教や、それから教徒に対して出す回勅でございますが、1991年にヨハネ・パウロ2世が回勅を出されております。ヨハネ・パウロ2世、皆さん御存じのとおり、ポーランドのご出身でいらっしゃいましたので、ヨハネ・パウロ2世が回勅を出すにあたって、宇沢弘文先生をお呼びになりました。そして、どういう回勅を出したらいいのかという

ことを宇沢先生に相談されます。そこで宇沢先生は、この回勅に副題をつけましょう。その副題は何か、それはですね、社会主義の弊害と資本主義の幻想という副題であります。ヨハネ・パウロ2世の祖国ポーランドはですね、社会主義の非人間的な抑圧から解放された瞬間に、何でも競争、何でも金儲けと言いはじめて、非常に不幸な結果に陥ってる。このことを憂いて出されたレーラム・ノヴァルムが、1991年のレーラム・ノヴァルムです。

その前に、私たちは歴史の大きな転換期をいつ越えたのかですが、それを見るためにはですね、いつその前にローマ法王がレーラム・ノヴァルムをお出しになったのかということを見ればいいわけですが、それはちょうど100年前に出ています。1891年に。レオ13世がですね、レーラム・ノヴァルムをお出しになっているんです。この歴史の大転換期というのはいつも大不況ですから。1873年から1896年まで、世界的に物価が下がり続けるっていう大不況でございました。失業者、倒産は巷にあふれていたわけですね。そのときに、レオ13世が出したレーラム・ノヴァルムには、副題がついていたんです。その副題はですね、資本主義の弊害と社会主義の幻想であります。それは、先ほども言いましたように、この大不況で失業と倒産があふれ出ている。資本主義の弊害がはっきりしている。しかし、社会主義になれば救済されるというふうに説くものがあるけれども、それは幻想にしかすぎないというのが、レオ13世がお出しになったレーラム・ノヴァルムでした。

そこで、1991年、つまり、宇沢先生が相談に乗ったときに出されたレーラム・ノヴァルムをお出しになったヨハネ・パウロ2世は、私たちこの歴史の大転換期に生きる人間に対して、次のようなメッセージを残されていらっしゃいます。それは、資本主義と社会主義を超えて、人間の尊厳と魂の自立を可能にする経済体制はどのようなもので、どのような方法で具体化することができるのか、という問いであります。

同時に、ヨハネ・パウロ2世はですね、今、私たちは二つの環境破壊を行いつつあるということを警告しています。一つの環境破壊、第一の環境破壊は、これは言うまでもありません。自然環境の破壊ですね。神は確かに自然を人間のためにおつくりになったけれども、しかしそれは、自然を生かす限りにおいてお使いになっているというお話をされた上でですね、この深刻な、人間が行っている自然環境の破壊について、ようやく人々は、人間たちは、自分たちのおろかな行為に、まだまだ不十分だけど気づき始めた。ところが、もう一つの環境破壊がある。それは何か。それは人的環境。人間の環境破壊ですね。つま

り、私たちが、社会をなして共生している人間がですね、人間と人間とのきずなを寸断し、分断し始めた。この環境破壊についてはですね、人間は認識すらしていない、というふうに警告をされています。私たちが、この明石市でもそうですけれども、子供たちがまちで育っていくときには、コミュニティで育っていくときにはですね、二つの木陰が必要になります。一つの木陰は、言うまでもありません。緑の織りなす木陰ですね。本当に、自然の緑がつくり出してくれる、その木陰です。もう一つの木陰は何か。それは、人間のきずなと先ほどから、市民の協働とかと言われてきましたけれども、人間と人間とのきずなが織りなす木陰、この二つのもとで、私たち子供たちは育っていく必要があるんですね。この二つのきずなを今寸断しようとしているというふうに言っているのではないかと思います。

これも宇沢先生がいつもおっしゃることですが、明治維新になってヨーロッパの人々が日本に、開国によって日本を訪れるわけですね。そのときに、初めて日本人を見たヨーロッパの人々が、さまざまな印象記を残しているんです。この印象記を見るとですね、日本人の特色、日本人の特色としてどの印象記も指摘していることが三つあります。

一つは、優しさですね。日本人はどうしてこんなに優しいんだろうと。第一です。

第二番目は、日本人はどうして謙譲ですね、譲っちゃうんだろう。自己主張をしないのに譲ってくるんだろう。

もう一つは、日本人はどうしてこんなにゆとりがあるんだろう。心のゆとりです。これは、私たちがミダスの呪いにとりつかれていく課程で全部失ったものです。ゆとりなんか持ったら競争に負けるぞ。優しさなんか持って、人にやさしさを与えたら、情けは人のためなのに、情けを人に与えたらその人のためにもならないというように誤解を始めて、優しさなんかを与えたら競争に負けるぞ、それから謙譲、譲ったらもうだめだ、もっとしごくんだという価値観に変えられてきたんですね。

もう一つ重要な点があります。どの印象記も指摘しているので、日本に見られる、これは特色というよりも日本で見られる光景としてどの印象記も指摘していることがあります。それはですね、日本の子供たちはどうして笑ってるんだろう。日本のまちにはどうして子供たちの笑顔があふれてるんだろうということです。これからの日本では、まちに笑顔があふれるということはありません。

私は終戦直後に生をうけました。そして、昭和30年代は貧しい、まだまだ貧しいときでした。お砂糖もままならず、みりんもままならずですね、私たちはお砂糖を酒屋さんに買いに行き、新聞紙にお砂

糖を買うんですね。それをなめて、ああ、甘さってというのはこういうものかというような時代でした。しかし、まちには緑のきずなど、それから人間の優しさのきずながあふれていました。こどもたちはみんな笑っていて、まちには子供たちのいたずら書きであふれていたんですね。そこで子供たちはさまざまな創造性、遊びを通じてですね、さまざまな工夫などを上製してきて、つくり上げてきたんですね。それを完全に失いました。まちの道というのは、人間が交流する場所です。ヨーロッパでは、まち、道というのは人間が交流する場ですので、人間が交流する権利を失わない限りにおいて自動車の通行を認めます。従って、まちとまちを結ぶような道は人間が交流しないので、これ自動車が通行しても構いませんよ。しかし、まちの中の道は、これは子供たちが遊び、子供たちが交流し、人間が交流する場ですから、カフェでも何でも出ていて構いませんし、自動車の通行は認めないんだというのが普通なのですが、日本ではもうそういう場はなくなり、子供たちの遊び場である道ですね、子供たちが遊んじゃいけませんと言ってるんですね。しかも、いたずら書きもしなくなったんですね。この間、うちの前の道にいたずら書きであふれていたんで、日本の子供たちもここまでたくましくなったかを見ていたら、前のイギリス人の子供がいたずら書きしているんですね。日本の子供たちはいたずら書きすらしなくなった、これは異常なことです。そういうことをやるから、大人になってからいたずら書きするようになるんで、まちが、大人がやってるいたずら書きがあふれてるという状態になり始めた。子供たちの笑顔がまちから消えていく。しかも、子供たちの遊び場であるまち、道はですね、子供たちが遊んでいるどころか、通学をするのにも命がけで渡るといような状態が全国津々浦々で起きているんですね。

私たちがつくらなければならない基本は、私たちの次の社会の構成員をどうやってつくっていくのか。それは、先ほども言いましたように、緑のきずなどそして人間のきずなが織りなす木陰でもって子供たちが育って行って、そして次の社会の市民的な基盤、それをつくり上げるような人々、これをつくっていくことではないかなというふうに思います。

こういう時代に、私たちはどんなことに注意をしていったらいいのかということで、私が考えている二つの言葉はお手元にレジュメが行っているかと思いますが、レジュメをちょっと見ていただければと思います。

2ページ目ですね。そこに二つのスウェーデン語を紹介しておきました。一つのスウェーデン語は、オムソーリという言葉ですね。この

オムソーリというのは、社会サービスのことです。英語でソーシャルサービスと訳されておりまして、日本で言う社会福祉よりもやや広い範囲で、医療とか福祉とか教育が含まれますので、教育とか、対人社会サービスと言われているようなサービスのことをオムソーリと言います。

もう一つの言葉は、ラーゴムという言葉で、このラーゴムという言葉は、ほどよいとか、ほどほどとかという言葉で、極端に豊かになること、極端に貧しくなることも嫌うスウェーデン人にとって重要な価値観ですね。中庸の徳と言ったらいいでしょうか、ほどほどがいいって言葉です。

先ほども言いましたけれども、私が育った昭和30年代には、こういうものが生きていました。子供たちの笑顔があふれですね、まちには自然と、つまり緑と、それから人間のきずなが織りなす木陰があふれていたんです。みんな懐かしいので、夕日3丁目とかなんとか漫画を読んでですね、ああ、昔は3丁目がよかったなと言ってるんですね。

流行歌、はやり歌は、必ずその時代の真理的な精神的なクルマ、その時代の精神的な風土を表しています。その時代のバックグランドミュージックみたいなものですね。昭和30年代にハナ肇とクレイジーキャッツというグループサウンズと言ってるにはちょっとあれなんですけど、というグループが、次のように歌っていました。金のないやつはおれのところに来い、おれもないけど心配するな。こういうふうに歌ったんですね。今、日本は何を言っているのか。国もですね、もう国は金がないんだ。金のないやつは出て行ってくれと、こういうふう言ってるんですね。国には金がないけれども、心配するな、おれのところに来いというのが統治の基本のはずなのに、そうは言っていない。そこが、未来に向かって、お金がないから不安だとおどかしつけていますが、そんなことはありません。お金なんかどうだっていいんですね。今の日本の多額な借金を、子供たちに残せるのか、残すのかとおどしてますけどね、子供たちになんか借金に残せません。簡単にわかりやすく言えばですね、借金を子供たちに残しちゃったなんていう試しは歴史的にないんですね。明治時代の前にいろんな藩があって、どこの藩も財政赤字だと苦しんでた。藩政改革をしなきゃいけない、あと何万両しないとプライマリーバランスがどうのこうのっていう議論をしていたんですけども、明治維新が起きると一気に上がっちゃう。両すらもないんです。貨幣単位も変わっちゃうんですね。あと10年たったら、日本の円が残っているかどうか危ないので、残せるかどうかわかんないですね。それよりも重要なのは、持続可能にしなければならないのは何か、それは人間の命ですね。そして子供たちに

引き継いでいく私たちの社会である自然です、人間が生きていくための。それを勘違いしちゃいけないわけなんですね。

このオムソーリという言葉は、先ほども言いましたけれども、社会サービスという意味なんですけれども、もともとの意味は悲しみの分かち合いという意味です。社会サービスというのは、悲しみを社会の構成員で分かち合うために出されているのだ。これがスウェーデンの人々の考え方です。医療は悲しみの分かちあいだっていうことはよくわかるんだけど、教育も悲しみの分かち合いなんですかって聞くと、そうですという答えが返ってきます。悲しみもみんなですね、悲しみの分かち合いなんだ。これがオンソーリの言葉ですね。そして、私たちは、悲しみを分かち合うために租税を払うんだ。租税を払って悲しみを分かち合うとですね、その分かち合った人も幸福になる。なぜなら、人間が幸福だというふうに感じる瞬間というのは、他者にとって自己の存在、自分の存在が必要不可欠である、自分はほかの人、自分が生きていないと、ほかの人に頼りにされていて、自分の存在が必要不可欠なんだっていうことを認識できたときに幸せだというふうに感じるはずだ。そういうふうを考えているからですね、悲しみを分かち合うと、悲しんでいる人だけではない、分かち合った人に恩恵があるのだ、みんなが幸福になるんだ、そのために租税を分かち合うんだ、こういう考え方に立っています。

ラーゴムのほうは中庸で、ほどよいバランスという意味ですから、ほどほどということでも生活をいたします。こういう価値観で生活を始めるとですね、まず、まちから商店街が消えるということはないんです。私はよく職業訓練の調査で、ストックホルムから100キロぐらい離れた小さなまちに行ったところ、その人々が、その職業訓練が一番いいというので見に行ったんですけれども、その人たちが、うちのまちの商店は港から遠いので価格が高いんですよ。高くねとこぼしてるんですね。100キロですから、向こうは車で1時間もすれば行っちゃいますので、これすぐ、じゃあみんなストックホルムに買い物に行っちゃいますね、とこういうふう質問しましたところ、向こうの人がびっくりしてですね、何でそんなこと考えるの。そんなことをやったら自分たちのまちから商店街が消えちゃうんだ。商店街が消えて困るのはだれか。住民ですよ。車を運転できないお年よりはどうするんですか。子供たちはどうするんですか。私たちは、まちから商店街が消えては困るから、自分たちの商店街で買い物をするんです。残すために買い物をしてるんです。ようやく日本もこれに気がついてきてですね、通産省がまた政策をすぐあそこの省庁は変えるんですけれども。スーパーをどんどんつくってですね。しかし、自動車で

買い物に行けないお年寄り、昔は全然そんなことはありません。御用聞きがちゃんと来てですね、お見計らいでもって、今日はおじいさんこんなの持ってきましたから、みんなやってくれたんですから。そんなのが完全になくなったんですね。逆にしなくちゃいけないときに、もう完全に失敗をしたわけです。

島との間に橋をつくるということになると、離島が反対しちゃうんですね。一回、バルチックの海があって、バルチックの海のところに、デンマークとスウェーデンのところに一つ橋をつくりますと。その橋をつくったために、海の水の流れがちょっとおかしくなってきた公害が発生してると。もう懲りたから絶対つからないという一つの理由です。それから、もう一つ橋をつくらない理由は、住民、つまり離島、島の住民たちが反対するんですね。なぜ反対するのか。この瀬戸内海の三つの橋というのは世界的に有名ですから、日本では瀬戸内海に三つの橋をつくったっていう話なんだけれども、公害が大変じゃないのと聞いてきます。さらに、もしも橋をつくったら、どういうことになるか。この島にですね、橋をつくったら、自分たちの住んでいる島はもうすばらしい島だから、みんな押し寄せて来ちゃうと。これ大変なことになっちゃうので橋はつくらない。どういうことで輸送しているのかというと、戦艦の飛行機の滑走路を上につんでいる母艦がありますが、滑走路の変わりに道になっている船があるんですね、つまり、甲板が道になっている船があってですね、この道が島にドンとくっつくんです。そうすると、車がダーッと入ってきて、その道の上に入ってきて、そのままきちっと固定化する。そして、こっちの島にボンと行って、道の船がどんどん動いている、そういうことしかやりません。なぜこれしかやらないのか。そうすれば私たちの島には、本当にこの島のすばらしさを知っていて、期待して、だれか来てくれる、だからこれが一番いいんだ、というふうに言っていますが、それはほどよいバランスということをついつも心がけているスウェーデン人ならではの知恵です。この二つがですね、私たちがこれから越えようとしている歴史の大転換期の大きなかぎになるということです。

分かち合いの思想というのは、このオムソーリとラーゴムという言葉に代表されているということですね、御手元の次のページで、3ページ目をあけてください。

これは、歴史の峠としてのクライシス、危機、今は100年に1度の危機とこういふふうに使われていますけれども、これ、グリーンSPANといった人の言葉ですね。この危機という日本語の、最初の危のほうは、危ういということですね。下の機、あとのほうの機のほうは、変化するという意味です。中国語でウィチー、ウィというの危うい



こと、チーというのは変化することですので、危うく変化するという  
ことです。英語ではクライシスと言いますが、このクライシスという  
のは分かれ道という意味です。医学で言いますと、このクライシスと  
いうのは、医者が今晚が病の峠ですというふうに行ったときの、病の  
峠というのがクライシスという状況ですね。クライシスの結論、分か  
れ道ですから二つしかありません。一つは破局ですね。もう一つは肯  
定的な解決です。このクライシス、危機というのは、一つの時代が終  
わって一つの時代が始まる大転換期に起きます、もう、一つの時代が  
行き詰まって、変えなければならないというときに起こるんです。定  
期循環というのは、在庫循環とか投資循環とか、投資の方針とか、機  
械の設備が古くなって新しく変えなくちゃいけないよというようなと  
きに投資循環などが起きるわけですが、こういう大きな危機、大不況  
というのは、産業構造そのものを変えなければならないという時期に  
起こるんです。一つの時代が終わるときに起きます。

100年に一度の危機ですから、この前の危機はどういう危機だっ  
たのか、それは1929年の世界恐慌ですね。1929年の世界恐慌  
というのは、どうい時代が終わりを告げたのかと言えば、それはイ  
ギリスを中心とする世界秩序の時代、パクス・ブリタニカと言われま  
すが、その時代が終わりを告げたんです。その時代はどうい時代だ  
ったのかというと、軽工業、繊維工業などの軽工業を基盤とする産業  
機軸とする産業構造、その上に自由主義国家、小さな政府ですね、夜  
警国家と言われますけれども、ガードマン的な役割しかしないんです、  
政府が。つまり、軍事とか、それから警察のような役割しかしないよ  
うな国家が成り立っていて、その国家をイギリスが金本位制度で束ね  
ていた。それがパクス・ブリタニカの時代だったんです。この時代が、  
1929の世界恐慌で最終的に崩壊していきます。1920年代は、  
金本位政府期といって、金本位制のほうに戻ろう戻ろうとするんです  
が、結局失敗して1929年の世界恐慌で一つの時代が終わるんです。  
そこで、私たち人類は、新しい時代をつくらなければならなかったん  
ですが、新しい時代をつくりそこなったんですね。それは、近隣窮乏  
化政策、隣を貧しくしてしまう政策というのを打たれたからですが、  
つまり、こういう危機の時代に、自分さえよければということで人間  
が行動をすると、結局新しい時代の形成に失敗をして、第二次世界大  
戦という悲劇を引き起こしてしまう。しかし、第二次世界大戦という  
大きな代償を払ったうえで、私たちは新しい時代をつくりました。そ  
れが、第二次世界大戦後に成立したパクス・アメリカーナという時代  
ですね。アメリカを中心とする世界秩序の時代です。そして、その時  
代というのは、軽工業ではなく重化学工業を産業基盤とする時代であ

り、その上に福祉国家という大きな政府が乗っていたんです。その大きな政府である福祉国家を、今度は金本位制ではなくブレトン・ウッズ体制というふうに言いますが、基軸通貨であるドルだけがあって、あとの国はドルに対して一定の為替レートで結びつける。一ドル360円というように、固定為替で結びつける。そういう時代で世界をまとめ上げていた。それがパクス・アメリカナの時代です。

現在の世界恐慌、これは1929年の世界恐慌で日本にドラスティックには起こりませんが、グズグズグズグズ起きます。よくリーマンショックからと言いますが、その前から起きていました。サブプライムローンですね。そこらあたりから起きはじめてですね、次はリーマンショック、その次はギリシャ悲劇、それから、今度はスペインだっというたらハンガリーが入ってと、こういう、次から次へと押し寄せてくるわけですが、そういう世界恐慌が起きてきて、この後どういう時代が成立するかといえば、これは重化学工業の時代が終わりを告げてですね、ソフトな産業ですね、サービス産業とか知識集約産業とかって言われているソフトな産業を機軸とする知識社会ができ上がります。農業社会というのは、人間が自然、大地に働きかけますが、工業の時代というのは、人間が自然に働きかける手段、つまり機械に働きかけていたんですね。人間がつくったものに働きかけていました。

ところが、これからのサービス産業とか知識産業とかというのは、人間に働きかけるんですね。サービスもそうですね。知識も同じことです。人間が人間に働きかける。人間のきずなが重要になってくる時代、それが知識社会です。そのときに、どういう時代ができ上がるか、どういう政府ができ上がって、どういうその世界秩序ができ上がるのか、これはこれから考えなくちゃいけません。そして、下手をすると大破局で、おろかにもまた人間は戦争を繰り返すかもしれないですね。

現在では、世界の中心であるアメリカがですね、アメリカを中心とする世界秩序、これは最終的に崩壊しました。第二次世界大戦後にパクス・アメリカナと言いますが、パクス・ルスアメリカナだったわけで、アメリカとソビエトを中心とする世界秩序だったんですけども、ソビエトのほうは1991年に崩壊をしてしまいました。ソビエト体制は1991年に崩壊をしますけれども、その引き金を引いたのは、皮肉にもゴルバチョフだったんですね。もはや暴力では社会主義を守ることはできないというふうに考えたゴルバチョフが引き金を引いたわけですが、パクス・アメリカナにおいては、ソ連邦パクス・アメリカナの崩壊は、ソ連邦崩壊におけるゴルバチョフの役割を拒まないで、そういう歴史の女神のいたずらが起きているというこ

とだろうと思います。

そこで、今歴史の大転換期になっているというお話をいたしました  
が、そういうときに、政府はどういう使命を果たせばいいのかという  
ことですが、4番目です。4ページ目をごらんください。

4番目、大転換期における政府の使命、一つやらなければならない  
ことは、社会的セーフティネットを張っとくことです。安全のネット  
ですね。世界から津波のようにパニック、危機が押し寄せてきたとき  
にですね、次から次へと押し寄せてきたときに、国民がパニック状態  
にならないように、生活の安心、安全を保障してあげる社会的なセー  
フティネット、これは社会保障というふうに言っても構いませんが、  
安全のネットですね。サーカスの空中ブランコなどで落ちてでも死なな  
いように張ってある安全のネットのことをセーフティネットと言いま  
すが、社会的セーフティネットを張っとくということです。

もう一つ重要なことは、社会的インフラストラクチャー、これはで  
すね、次の時代、重化学工業の時代が終わって次の時代、これは知識  
社会になるので、社会的なインフラストラクチャーというのは、次の  
時代の産業構造を支える前提条件をつくっておくこと、この前提条件  
のことをインフラストラクチャーと言います。重化学工業の時代であ  
れば、全国的な鉄道網とか、全国的な道路網とか、それから全国的な  
エネルギー網、これが重化学工業を支えている前提条件になりますの  
で、ドイツの鉄血宰相ビスマルクは、世界で初めて社会保険をつくっ  
て、社会的セーフティネットを整備するとともに、熱血宰相と言われ  
ているように全国的な鉄道網を整備して、重化学工業が発展していく  
状況をつくったわけですね。ところが、これからは知識や情報、それ  
からソフトな産業の時代になりますから、物的な前提条件ではなく、  
社会的な、人的な人が育てる人的投資などの人的なインフラストラク  
チャーが重要になってきて、それを張りかえてあげる。つまり、安心  
して新しい産業や仕事づくりにチャレンジしていくようにしてあげる、  
これが重要になるということです。

こういう試みは既に、この大飢饉、リーマンショックとか、サブプ  
ライムローンとかっていわれる前から、世界各国は始まっています。  
それは、第二次世界大戦後、世界の国々がつくっていた福祉国家が行  
き詰まりを始めたころから始まるわけです。福祉国家が、それから重  
化学工業を基盤にした福祉国家、そしてその福祉国家をまとめ上げて  
いたアメリカの世界秩序、これがぐらつき始めるのはいつからか、そ  
れは1973年からです。

1973年に石油ショックが起きます。石油ショックというのは皆  
さん御存じのとおり、重化学工業の大量生産、大量消費を支えたのは、

自然資源を多消費する、そういう産業ですね。重化学工業というのは自然資源を多消費するわけです。確かに、重化学工業による大量生産大量消費によって、私たちは欠乏という、人類が抱えていた忌まわしい貧困からある程度脱却することができました。しかし、そのかわりに、重化学工業というのは自然資源を多消費しましたので、石油ショック、つまり、自然資源価格、石油を初めとする自然資源価格は高騰してですね、重化学工業がもう行き詰まりはじめているということをシグナルを送られ始めた。それが石油ショックです。

さらに、もう一つの事件が起きます。それはさっき言ったブレトン・ウッズ体制が崩れ落ちるんです。つまり、ブレトン・ウッズ体制というのは、ドルを基本として、ドルとの間で固定為替相場制だったんですね。1ドル360円。これが崩れ落ちるのが1973年で、変動為替相場制度とって、通貨を市場に乗っけて取引をするということをやりはじめたのがこの年なんです。

さて、もう一つ事件が起きます。それは、福祉国家はですね、第二次世界大戦を起こしてしまった反省から民主主義というのを重視したんですが、1973年に9.11が起きます。9.11というのは、2001年に起きた、9月11日に起きたですね、航空機を使ったテロ事件じゃありません。1973年9月11日に起きた事件です。それは、チリの大統領サルバドール・アジェンテが惨殺された事件ですね。アメリカは、世界を統合してきた旗印であった民主主義を、みずから野蛮な暴力によって崩していく決定的な事件でした。

この1973年の9月11日、サルバドール・アジェンテは大統領宮殿のベランダからチリの民衆に対して最後の演説を行います。私はこの歴史的な瞬間に対して、チリ人民の忠誠に死をもって答えなければならぬことを知っている。しかし、諸君は銃弾の前に身をさらしてはならない。歴史をつくるのは人民なんだ、裏切りが勝利しても必ずよりよい社会を目指して動き続ける人々の歩みがこのまちの道を埋め尽くすときがやがて来る。チリ万歳。人民万歳と言って殺されていくんですね。この話を、先ほど繰り返すんですが、私の恩師宇沢先生は、私にあてた手紙でこの9月11日、アメリカでもってですね、シカゴ大学などにいらっしやいましたので、アメリカでもって同僚たちとの研究会の後のパーティに出ていたら、そのときにチリの大統領サルバドール・アジェンテが殺されたというニュースが入った、そのときに、そこにいたフリードマンの仲間たちが、小さな政府の民営化、規制緩和を進めてきたフリードマンの仲間たちが、歓声を上げて喜び合った。私はそのときの彼らの悪魔のような顔を決して忘れることはできない。それは、市場原理主義が世界に輸出され、今日の世界的な

不幸が世界にあふれ出ていく決定的な瞬間だった。そして、私自身にとって、宇沢先生にとって、シカゴと別れを告げる決定的な瞬間だったというのもおっしゃっていらっしゃいます。

サルバドール・アジェンテを惨殺したピノチェトはですね、独裁政権、3,000人を殺したと言われてますが、独裁政権につくや否や経済閣僚をすべてフリードマンの弟子たちによって占めさせます。そして、規制緩和民営化、小さな政府と言われていた新自由主義の政策をチリで展開していくわけですね。それをフリードマンはチリの奇跡と絶賛をいたします。フリードマンはノーベル経済学賞をもらったとよく日本では報道されていますが、残念ながら、経済学にはノーベル賞はありません。ノーベル経済学賞と言われているのは、世界で最も古い中央銀行であるスウェーデンの中央銀行が出している賞です。ノーベル財団が出しているわけじゃありません。ただ、その賞のあたりにアルフレッド・ノーベルを追悼するというまぐら言葉が入ってるんですね。これをノーベル賞だと言ってるんですが、今、ノーベルの家族たちは、遺族たちはですね、これに抗議をしています。ノーベルはお金もうけは大嫌いなんだ、ノーベル経済学賞をやめてくれ。中央銀行賞でいいじゃないかと、こういうふうには、ノーベルという言葉を使わないでくれというふうに抗議をしておりますが、そのノーベル経済学賞を受賞されているようなものをももらった、そのフリードマンの思想にすぐに飛びついて、小さな政府を掲げる政権が1979年にイギリスで成立します。サッチャー政権ですね。その後、1979年にサッチャー政権ですね。その後、1981年にアメリカでレーガン政権、そして、1982年に日本で中曽根政権という行政改革、小さな政府を主張する新自由主義の政権が次から次へとできてくるわけです。この新自由主義を掲げる政権は、これまでの福祉国家を徹底的に、根底から批判してですね、やめようというふうに批判するわけです。世界の国々は、第二次世界大戦後すべての先進国は福祉国家を目指しました。それが、石油ショックを起点にしながらばらけます。一つは、福祉国家をかなぐり捨てて小さな政府にしていくアングロサクソン、アングロアメリカン諸国です。日本を含めて。

それから、もう一つは福祉国家のよいところ、雇用や福祉を重視していこうという、よいところを生かしながら、新しい状況のもとでどうにか福祉国家の理念を生かした新しいモデルをつくれぬか、それがヨーロッパ社会経済モデルなんです。ヨーロッパ社会経済モデルには二つありまして、一つはヨーロッパ大陸モデル。ドイツやフランスが目指した道。もう一つはスカンジナビア諸国、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェーなどの国々が目指した道です。

御手元のページで、右下に12ページと書いてあるところを見ていただこうと思います。ここに四つの国を掲げてあります。アメリカ、ドイツ、スウェーデン、日本です。アメリカというのは、さっき言いましたアングロサクソンモデル、新自由主義の政策をとる国の代表としてアメリカをとってあります。ドイツっていうのは、ヨーロッパ大陸モデルの代表格としてドイツをとります。そしてもう一つ、スウェーデンはスカンジナビアモデルの代表格としてスウェーデンをとりました。そして、日本をつけ足してですね、四つの国を出しております。一番左側の欄を見ていただければと思いますが、これは、社会保障にどの程度、力をいれているのか。これは租税負担率とも大体リンクしているというふうに考えていただいて構いません。アメリカは小さな政府を目指しておりますので、社会保障についてはGDP比で15.9と非常に小さいんですね。それに対して、雇用や福祉のよいところを生かしながら新しくそれをどうにか再生できないかと考えたヨーロッパ大陸モデル、ドイツやスウェーデンの国々は、社会保障のウェイトが26.7、29.4と高くなっています。もちろん、日本は新自由主義国ですので、アメリカと同じように小さく18.6、社会保障を押しえ込んでいます。

さて、小さな政府にすれば、つまり、政府を小さくしていったって、税負担を低くしていけば、経済成長するんだっていうのが新自由主義の主張です。実際に経済成長したのかというと、アメリカを見ていただきますと、2000年から2006年の平均で3.0というふうに高い経済成長をしています。ところが、ドイツは大きな政府にしているので、1.2というように経済成長が低くなってるわけです。社会保障の大きなドイツは経済成長を低くしている。スウェーデンを見ていただきますと、スウェーデンというのは2.6で、つまり、社会保障などを少なくして、租税の負担を小さくすれば経済成長するっていう考え方は、アメリカ、ドイツに当てはまるわけです。スウェーデンには当てはまりません。スウェーデンはドイツより大きな制度、ドイツより社会保障を充実しているのに経済成長しているんですね。ところが、日本を見ていただきますと、日本はアメリカと同じように小さな政府にしているのに経済成長しないんですよ。ドイツ並みです。しかも、2000年からこれ2006年ですから。小泉改革が絶賛されているときです。いざなぎを超える景気が持続しているんだと2002年から2008年まで、日本はいざなぎ、日本の歴史始まって以来経済成長を持続したというふうに言われているんですが、経済成長率は国際的に見ると低かったんですね。

菅総理が言っている、税負担を高めても経済成長するんだっていう

か、メディアの報道では間違えて見ている。税負担を高くすれば経済成長するというふうに総理は言っているというふうに言っていますが、そういうふうには言っていないですよ。税負担を高くしても使い道を間違えなければ経済成長するって言ってるわけですね。つまり、税負担が低いか高いかっていうことと、経済成長率との間には関係がないってことです。

さて、経済的なパフォーマンス、経済発展というのは、何も経済成長するっていうことだけではありません。経済成長しても貧困があふれてたら、格差が大きくなったら、経済発展とは言えません。当然ですね、日本はこの間、2000年から2006年まで経済成長したんですけれども、賃金が減り続け、生活が苦しくなったっていう国民の割合は増加し続けたんです。よく経済成長、成長戦略がないと。成長戦略が必要だと。何のために成長戦略を必要なのか、それは賃金を低め、国民の生活を苦しめるのは経済成長だから、そのために成長戦略は必要なんだというのであれば、そんなのは必要ないわけですね。

つまり、格差や貧困、社会的な整備がどうなってるかということが問題です。格差を見ていただきましょうか。ジニ係数というのは、数値が高いほど格差が激しいことを意味します。アメリカを見ていただきますと0.381、非常に格差の高い国になっているのですが、ドイツを見ていただくと、アメリカよりも一けた少なく0.298と格差を押さえ込んでいる。スウェーデンに至っては0.234、さらに小さく押さえ込んでいる。日本を見ていただきますと、アメリカ並みに0.321と格差の大きな社会になっているということですね。格差があっても貧困が少なければいいということになるわけですが、相対的貧困率を見ていただきますと、アメリカは17.1と貧困があふれ出ているんです。OECD諸国の中で最も貧困が激しいのはアメリカです。そして、日本に対してOECDが一昨年勧告したのは、日本は今とんでもない格差社会に陥ってるぞ。貧困がOECD諸国で最悪のアメリカに肉薄して第二位につけてる。日本を見ていただきますと15.3の貧困があふれ出ているんですね。そして、ドイツは9.8、スウェーデンは5.3、一けた少なく押さえ込んでいるんです。

しかし、政府を大きくしてしまうと財政が持続可能じゃなくて赤字になるというふうによく言われますが、そんなことはありません。見ていただくと、アメリカは2.8、もう赤字があふれ出ている。ドイツは2.7、これは、ヨーロッパのユーロを守るためのマーストリヒト条約の収れん基準で、ヨーロッパを3.0以内にしなくちゃいけないんですが、2.7というのはぎりぎりです。スウェーデンを見ていただきますと1.4で、財政は黒字です。デンマークも黒字です。ス

カンジナビア諸国は財政黒字なんですね。日本を見ていただきますと6.7で大赤字でした。ところが、日本はこれを誇っていたわけですね。政策の時にはいつでも日本の財政赤字は大変だ、二言目にはそれを言って日本国民をおどし続けてきたんですが、誇れなくなってきました。これはリーマンショックによって、世界の経済が悪化して、イギリスはもう日本を追い越して9%近くの財政赤字になってますから、イギリスに抜かれ、アメリカにも抜かれちゃいました。そしてついに、この間、フランスに抜かれたんですよ。あと残っているのはドイツなんですけど、ドイツが刻々と日本を追い上げて5%まで来てますから。このまま落ちついているとですね、財政赤字は悪い国だって自慢してたのが自慢できないような状態に陥ってくるということになってしまいます。つまり、先進国の中では財政収支がイーブンに入ってしまうということですね。しかし、いまのところを見ていただくと、ちょっとここでは日本は財政赤字は悪いことになってしまっていたということです。

さて、ここまでで見ていただければ、もうおわかりになりますね。社会保障を強くすると貧困や格差を抑えることができる。しかし、下手をすると、ドイツのように成長をとめてしまうわけがあるということですね。ところが、社会保障を小さくしていってしまうと、格差や貧困というのは必ずあふれ出るということです。しかし、社会保障を小さくしていくと、経済成長をする場合もあるということが言えるということです。

問題なのが日本です。日本はこの小泉政権のもとで行われた改革の中では、すべてに失敗してるんです。これ、なかなかできることじゃないですよ。下手な鉄砲も数打ちゃ当たるんですね、どこか一ついいことがあるんですが、全部に失敗するという偉大なことをやってのけたのが日本ですね。これ、どうしてこうなってしまったのかということ。特に今重要な点は、ドイツとスウェーデンを比べてもらって、ドイツはなぜ経済成長をしないのか、スウェーデンはなぜ経済成長をするのか。私たちが求めているのは、経済成長もするし、そして格差や貧困もなくなる。成長はするけれども格差や貧困があふれているでは困るんですね。格差や貧困を伴わない経済成長と、それから財政も支えていくということが望ましいということになるわけです。

じゃあどうしてスウェーデンは格差も貧困も押さえ込むことができたのかというのは、福祉のやり方にかかわってきております。お手元のちょっとページ数が17、あと18が消えてるんですが、一番最後のページですね、裏の一番最後のページ、右下にページ出ておりませんが、この閉じの最後を見ていただければと思います。いいでしょう



か。

ここで、日本、フランス、ドイツ、スウェーデンとこう見ていただいでですね、今社会保障の、これGDPに対する割合ですので、GDPに対する割合でもって社会保障が一番ウエートの高い国はフランスです。スウェーデンは第2位ぐらいですね。さて、今、ドイツとスウェーデンと日本を比べていただきますと、日本の特色というのとは何か。一番下の、高齢者現金と書いてあるの、これは年金です。その次の保健医療というのがありますね。これ、疾病保険です。医療保険ですね。日本を見ていただきますと、特色は何か。年金と医療保険はまあまあ、まあまあというかいいいんですね。それ以外がないということです。ドイツとスウェーデンの特色は、年金と医療保険とそれ以外の社会保障が三本柱になっているところですね。じゃあ、それ以外の社会保障というのとは何かということですが、年金を見ていただきましょうか。日本は7.41ですね。スウェーデンは7.05ですが、スウェーデンをもう既に抜いてるんです。医療保険を見ていただきましょうか。医療保険は6.31、スウェーデンは6.77ですから、医療保険もまあまあなんですね。さて、問題はその後です。家族現金というのを見ていただきますと、これ、家族現金というのとは子供手当とかです。スウェーデンは1.52、ドイツは1.43ですね。日本は0.35なんですよ。この家族手当をふやすと、物すごい大合唱になるんですね、日本は。現金ばらまき政治だ。財政っていうのはばらまくんですよ。所得再分配やるんですから。ばらまかないでどうやって所得再分配をやれっていうのか。何でああいう言葉を使うのかっていうことになるわけですが、日本は、スウェーデン1.52で、日本は0.35しか出してないということです。ドイツは1.43出して、ここまでだとスウェーデンをドイツは圧倒しています。いいですね。ドイツは経済成長しないんですよ。成長しないタイプの福祉はどういうことになっているのかというと、1.43まで、ここまではドイツが圧倒している。そのあとで逆転される。そのあとで逆転されるものは何か。それは4.42スウェーデンが出している高齢者現物っていうのは、サービス給付です。介護を含む広い意味での養老サービスですね。高齢者福祉サービス。サービスですからお金でもらうんじゃありません。サービスで提供される。現金給付は中央政府、国の責任です。サービス給付は地方自治体の責任です。国はサービス給付を提供することはできません。なぜできないのか。国がサービス給付を提供しようとしたら、国の出先機関を全国津々浦々、地域社会ごとに設置しなくちゃいけないわけです。さらに、サービス給付というのとはそれぞれの地域の生活実態に合わせなくちゃいけないので、その地域ごとに決めた

ほうが生活にあったサービスが出ていきますので、地方自治体しか提供することができません。これを見ていただくと、スウェーデンが4.42、ところがドイツは0.84、余り出してないんです。これは、スウェーデンでは依然としてまだ女性は家庭の中において、お年寄りの面倒とか子供たちの面倒とか家事をすべきだという保守主義的な批准が強い国だからです。日本と同じですね。0.84しか高齢者サービスを出していない。そして日本は何か。日本は1.32ですので、スウェーデンの4分の1ぐらいしか出してない。

さて、その次の家族現物、これは何かというと、この家族現物というのは育児サービスですね。保育のサービス。保育のサービスを見ていただくと1.69なんですね、スウェーデンは。ドイツは小さくなって0.74、日本はさらに小さくなってしまってドイツの半分で0.46しか出してない。これもサービス給付ですから地方自治体の責任ですが、地方自治体から別に行っていないということです。

そして、そのあとの最後のその他、ここで重要なのは積極的労働市場政策と言われているものなんですけど、再訓練、再教育のサービスです。つまり、これまで重化学工業のセンパン工などで働いていた人たちは、もはや重化学工業の時代ではないのでプログラマーにしたり中学校の理科の先生などにしたりするような政策がここに含まれてくるのですが、これを見ていただきますと、スウェーデン6.69、ドイツが4.10、そして2.47。総理に言っている強い福祉というのはこういうことですね。つまり、強い福祉というのは何か。それは、現金給付だけではなく、サービス給付とセットで提供されるということです。子供たちの生活というのは、現在の子供手当、それから保育のサービスとセットで子供たちを守ってあげるんです。お年寄りの生活は、年金と、それから広い意味での高齢者福祉サービス、サービス給付とセットで提供してあげる。失業した人に対しては、失業保険でお金を配るだけではなく、もう一回チャレンジできるようなサービスとセットで提供してあげる。サービスは地方自治体、現金は国が責任をもつ。そういう強い福祉に切りかえるということがここから言えるわけです。こういうことをしておくと、格差や貧困を、ドイツよりもスウェーデンのほうが格差を押さえてましたね。ドイツのほうが格差が大きかったわけです。成長もしなかった。その秘密はこういったことを提供しているかいらないかです。日本はなぜ貧困や格差があふれ出たのか、それは1990年のときに、90年代に労働市場の規制を緩和してね、非正規従業員をふやしちやっただからなんですけれども、それは同時に、どういうことを意味しているのかといえ、今言ったような保育のサービスやお年寄りの高齢者福祉サービスを出し

ていないと、格差や貧困があふれ出るんです。なぜなら、産業構造が変わったので、重化学工業のもとでは主として男性が労働市場に行きに行っているんです。なぜなら、重化学工業では同質の筋肉労働を大量に必要とするからです。軽工業の時代、1929年までは、男性は労働市場に働きに行きに行きしていません。主要な産業は製紙や綿織物業でしたけれども、こういう軽工業で働いている人々はみんな女性です。男性は働いていないんですね。女性が、人生の一時期家計を補的に働きに行く、これが軽工業の時代です。

ところが、重化学工業化すると、今度は男性が労働市場に出てくるんです。そして、家庭内には女性が無償労働、ただ働きをして、育児や保育や、それから病気になった病人たちのケア、いわば家事労働をしてですね、生活を守ってきたわけです。従って、これまでの福祉国家というのは、現金給付、お金を配って、つまり市場の外側で政府がお金を配ってさえいれば、国民の生活を守れたんですね。お金を稼いでくるのは重化学工業の元では男性ですから、男性が稼いでくると想定されている賃金を正当な理由で失っちゃったと、失業したんですと言えば、じゃあ失業が変わって失業保険を配ってあげますよ。年をとって働けなくなったんです。じゃあ年金を配りますよというふうにお金を配れば、あとは家庭内で、無償労働でサービスを精算してくれる女性がいたので、国民の生活は守れたんです。ところが、繰り返すようですが、今や、好むと好まざるとにかかわらず、日本の産業構造は重化学工業化していないんですね。どんどん出て行っちゃってますから。残っているのはサービス産業、それから知識産業なんです。そうになると、そこにですね、大量に女性を必要とする労働市場ができ上がるんです。そのときに、分かち合いで、つまりすべての社会が子供たちを社会の責任として育てようというように考えて、育児サービスや養老サービスを提供していないと何が起こるのか、労働市場が二極化しちゃうんですね。労働市場が二つに分かれて、パートの労働市場とフルタイムの労働市場になってしまう。それはなぜかというと、女性も労働市場に参加するようになってくると、労働市場に出ていく人が二通りになっちゃう。家族の中での無償労働から完全に解放されて労働市場に出ていく人、主として男性、それから、家族内での無償労働、育児とか養老に足を引っ張られながら労働市場に出ていく人、女性ですね、二つに分かれちゃう。そうすると、パートの労働市場とフルタイムの労働市場に分かれる。これは正規の労働市場、非正規の労働市場と言っても構いません。労働市場が二極化すると賃金の格差ができます。さらに、一たび労働市場が二極化してしまうと、新しく労働市場に出ていく学卒者を、景気が悪いときにはパートの労働市場で受け

ちやうんですね。従って、現在ではパートの労働市場で、非正規の労働市場でと言ってもいいかもしれませんが、そこで苦しんでいるのは女性と若者たちなんですね。

さて、そういうふうに労働市場が二極化すると、格差と貧困があふれ出ます。OECDが日本に対して格差と貧困があふれ出ているぞということに対して、日本政府は、日本には格差と貧困は存在しないというふうに言い続けてきました。それは、格差と貧困があったとしても、それは見せかけだ、日本は世界でもっとも高齢化が進んでいるからそれが重要なんだ、原因なんだと言ってきましたけれども、OECDは、確かにそれもある、しかし重要なのは、日本の労働市場が二極化してしまっている。賃金の格差が余りにも激しくなっているから、貧困と格差があふれ出てるんだということを言い続けてきて、結局日本政府も昨年、麻生政権のもとで4月にできた、4月の経済財政諮問会議は、日本では格差と貧困があふれ出ているという事実を認めざるを得なくなりました。日本は、世界に格たる貧困と格差があふれ出ている社会になってしまったんですね。その原因は何か。それはサービス給付を出していない。これは、地域主権改革と言おうと地方分権と言おうと構いませんが、地方自治体が地域住民のニーズに応じてサービスを出していないので、住民が欲しがっている保育園や産婦人科や、産婦人科と小児科は公立病院じゃないと出てきません。そもそもペイしないんですから。公立病院を望んでいるそこが出て行かないんですね。そのことが結局格差を決定してしまったというのが日本の実情です。

13ページを見ていただければと思います。もう一つは、社会保障で重要なのは雇用保障ですが、雇用の保障のやり方っていうのは二種類ありますね。民間の会社にくびにさせないってことです。くびにさせないぞと認めちゃうっていうことですね。雇用の弾力性と書いてありますが、この雇用の弾力性というのは首切りやすさというふうに考えてもらえばいいんですけれども、この雇用の弾力性、つまり、一番下にアメリカがきていますけれども、アメリカは首切りやすい国なんですね、一番。そして、ドイツやスウェーデンは、これは首切りがやりにくいということになります。日本がその中間ということになっているのですが、首切りをさせないということと同時に、もう一つ雇用を守るということは、失業した人を再就職させてあげるということがもう一つの政策ですね。それを積極的労働市場政策とこういうふうに言いますが、14ページを見ていただければ。

14ページで、再訓練、再教育によって、もう一度失業者を戻してあげるという政策を打ってないのは、アメリカと日本なんです。打っ

ている国がドイツ、スウェーデンなんです。ただ、ドイツは余りうまくいってないんです。ドイツとそれからスウェーデンとの差は何かというと、先ほども言ったように、新しい産業構造の転換にあわせて福祉のやり方を変えている。つまり、重化学工業の時代のように、男性中心の労働から女性も参加するような労働市場になってくると、そういうことを守れるような方向に社会保障も変えていく、さらに、女性も労働市場に参加できるようにすると同時に、再訓練、再教育に力を入れて、新しい産業構造にあわせた労働能力を身につけさせる、この政策が打っているか打っていないかということがポイントになるということです。

お手元の5ページ目を見ていただきますと、ここにフレキシキュリティに学ぶというところがありますが、フレキシキュリティという政策はデンマークがとっている政策で、デンマークは労働市場を弾力化させる、つまり首切りやすくする。しかし、日本と違って、日本というのは首切りしやすくするというのは何かというと賃金を安くするためなんですね。なぜ賃金を安くするかというと、賃金を安くすると、インドや中国と国際競争率に勝てるということなんですが、デンマークやスウェーデンのやり方はそうじゃありません。中国やインドとは競争しない。なぜなら、中国やインドというのは一回り、1周おくれで重化学をやっているののでいずれ限界になるので、重化学工業などはインドや中国に任せる。中国やインドに任せると。我々は知識集約の方向に産業転換していくので、そのために首切りやすくする。なぜなら、中国やインドと同じような産業で勤めている人は、早くそういう産業からやめてくださいと、首切りしやすくしている。そのかわり、産業構造を新しい成長産業であるサービス産業とか知識集約産業に移していくためですから、失業しても大丈夫ですよ、寛大な生活保障によって失業しても生活をちゃんと保障しますと。さらに重要な点はですね、活動保証。つまり、再訓練、再教育によって、新しい産業で仕事ができるように訓練しますから。つまり、首切りやすくする目的が古い産業から、衰退していく産業から新しく成長していくソフトな産業のほうに移すためにやっているわけですね。日本はそうじゃありません。産業構造を変えるつもりはさらさらないわけですね。競争相手は中国、インドだと思っているわけですね。中国、インドというのは20年前の日本の重化学工業のことをやっているのみなだけですから、キャッチアップをかけてる・・・で、そこと競争しようというようなことは考えない。それが日本のやり方なんですね。このやり方をしていると、さっきも言ったような悪循環が起きてしまう。今までの政策はどういうことだったのかと言えば、小さな政府にするために減税を

しよう。減税をすると、競争力が強まって経済が活性化するんだ。しかも、この活性化するというのは、活性化するための減税は、豊かな人に減税してやると。なぜなら、豊かな人っていうのは努力する人なのね、努力した人が報われる社会にしよう。お金持ちに税金をかければ、お金持ちは何か努力した人になってるんですけども、努力した人が報われない社会になってしまう。これが日本なんだと、こう言い続けられてきました。お金持ちがお金持ちとして生きていける社会にするためには、お金持ちがよりお金持ちになるような社会にしなければならない。そういう減税、最高税率を引き下げ、法人税率を引き下げてですね、お金持ちがよりお金持ちになるような政策をすると、トリクルダウンとってですね、お金持ちのおこぼれがトリクルダウン、滴り落ちてきて、貧しい人も豊かになる。さらに、経済が活性化すると税収が上がって、そして増税をしなくても財政が再建できると、こういうふうに言われたんですね。

ところが、やった結果どうだったのか。全部逆の方向に回転しました。お金持ちの減税をする、法人税の減税をする、経済成長したか、しないのは見ていたとおりです。しないどころか、税収は減しましたので、ワニの口があいたと言われているんですが、最初はこうなっていて、下の税収がボンとこう低くなってですね、ワニの口が引いたように財政赤字が大きくなっちゃったんですね、逆に。最近ではあごが外れた言われて、ドンと。財政も悪化してしまっ、極端な財政赤字を抱えるようになってしまった。さらに、トリクルダウンで滴り落ちるって言ったのが、滴り落ちるところか貧困や格差があふれ出る、これ逆回転にしましょうと。私たちが今必要なことは、さっきも言いましたけれども、国民がパニックに陥らないように強い社会保障にしてあげる。強い社会保障にしてあげるということが、国民に安心して冒険できるように、新しい産業にチャレンジできるようにしてあげる。先ほども言いましたけれども、新しい産業構造にあわせるように福祉を変えていく。現金給付だけではなく、サービス給付もセットで、さらに積極的労働市場政策などのように、極端に言えばセーフティネットというのは、ただ、落ちこちても知らないよと言っていたやつを、それをもっと強くして、もう一回トランポリンのように戻してあげる。そういう政策を打つと、産業構造が変わって経済成長するようになる。強い経済になる。こうしたことを支えるためには、どうしても強い財政、つまり、税負担水準を高めておくということが重要である。これ、ストロングファイズ、つまり、強い財政、強い経済、強い福祉、7ページ目に書いておきましたけれども、これまでの上げ潮路線と言われている、減税をすればすべて解決するというのとは逆に、私たちは

今必要なのは、減税路線によって社会保障がぼろぼろにされてきた。これを、社会保障を立て直すために財政を立て直そうと。財政を立て直して社会保障を立て直すのは、必ず強い経済力が生まれてくる。これが、三つのスリー・エスの好循環、今までの循環と逆にしようというのを、菅総理になる前に、財務大臣のときに私の方からお話を申し上げ、菅総理はこの政策で行くというふうに、今走ろうとしているという状況にあります。

私たちが今必要なことは、この協働の困難、次から次へと世界から押し寄せてくる不幸に、今、国民が協力し合ってですね、団結して進まなければならない。1929年の世界恐慌が起きたときに、ロンドンエコノミストはですね、スウェーデンだけがこの世界恐慌の中で例外的に、巧みに経済を再建している。スウェーデンはこの世界恐慌という絶望の海に浮かぶ希望の島だと言ったんですね。スウェーデンは どうしてそういう政策に成功したのかというと、スウェーデン政府が1932年に掲げた、国民の家というビジョンです。国民の家というビジョンはですね、国家は家族のように組織化されなければならないという原則です。現在、世界恐慌のもとで、スウェーデンには倒産と失業者が群れを成している。この雇用不安のもとに、私たちが乗り越える方法はないか。それは家族のように組織化することだ。家族の中ではですね、どんなに障害を抱えていようと家族のために貢献したいと思ってる。家族はみんなで協力をしあって、その障害、どんな障害を抱えている人でも家族の一員として何らかの形で、ささやかでもいいから自分で貢献したいと思ってる。国民も同じことだ。国民も、すべての国民のために何らかの形で貢献したいと思ってるんだ。失業というのは、そういう、国民が国民のために何らかの貢献をしたいんだという切なる願いを無残にも打ち砕くものだから、失業を脱却しなくちゃいけないと、こういう考え方なんですね。それが分かち合いの思想です。

日本人は、今失業者に、失業は怠けているんじゃないかという、失業者を救済したりしたら甘えるんじゃないかとか、そういう発想方法なんですけど、もともと日本人にはそういう発想方法はなかった。日本人はいつも助け合って協力をしていた。スウェーデンの人々はそれをよく知っていますから、スウェーデンの人々は、スウェーデン人は集団主義的に動くから、協力をしあって動いて個人主義的ではないので、スウェーデン人はヨーロッパの日本人だと言われていることを誇りにしています。それは、日本人をスウェーデン人は尊敬しているからです。日本人を尊敬している国民のことを言うと、日本人はスウェーデンとは違うとかって言うんですね。アメリカ人と日本人は同じか、

アメリカ人というのは一つの人種では存在していないわけですが、スウェーデン人が日本人をなぜ尊敬するのか、皆さん御存じのとおり、それは一つは、スウェーデンに行ってもらえればわかりますが、目の前にバルチックがあって、バルチック艦隊が出て行ったところですから。いつも痛めつけられていたロシアを打ち破った国、フィンランドで最大のビール会社は東郷元帥を記念した東郷ビールです。

それともう一つ、日本人はよく知られていませんが、日本人を尊敬しているのは、日本人は何てすばらしい知恵のある民族だろうと。それは、第一次世界大戦後ロシアから、ロシア帝国からフィンランドが独立したときに、フィンランドとスウェーデンの間にある島の領有が問題になったんです。フィンランド領なのかスウェーデン領なのか。そのときに、つかつかと一人の日本人が登場します。私たち東大の経済学部を支えてくれた偉大な先生ですが、新渡戸稲造先生です。国際連盟事務局次長だった新渡戸稲造先生が行ってですね、名裁定をしたんです。この島の領有はフィンランドとする。従って、フィンランド国民は万歳ですね。しかし、言語はスウェーデン語とする。ヨーロッパでは言語が決定的な意味を持ちますので、言語はスウェーデン語にするということで、スウェーデン国民も喜んだ。いずれの国民からも尊敬される民族に日本人はなってるんですね。日本は、下手すると外国に出ていくと二つの国から憎まれる裁定をせざるを得なくなってますので、外交能力は非常に落ちていますが、これまでではそのような名裁定を日本人はやってきて尊敬されていると。そうしたことの精神を見ていただいても、分かち合いですね。日本的に言うと足して二で割る裁定だったんですけれども、お互いに分かち合うんだという名裁定を新渡戸稲造先生はやってのけ、日本人が尊敬されている。

時間をちょっとオーバーをいたしましたことと、取りとめのないお話になったことをおわび申し上げて、私のつたない話とさせていただきます。どうもありがとうございます。